

1 どの子が可愛い

大きな子小さな子、白いの黒いの混りっ毛、短毛長毛ちぢれっ毛、世の中いろんな犬がいて、それぞれ可愛い目をしてる。

犬を我が家の家族の一員に迎えようと決めたとき、候補に挙がった犬種は少なくなかった。できればみーんな欲しい。けれど、そうはいかない。仲間が多いのは良い点多いけれど、スベースだってそんなにないし、第一、数が増えれば増える程、飼い主の愛情だって分散する訳だから、飼われた方も気の毒に思える。ということ、我が家では一頭だけ飼うことにしたから、新しい家族を決定するには苦勞した。いろんな犬について記された本を手当たり次第に調べ、知り合いの獣医さんに相談する。そして、出した結論は、“ラブラドル・レトリバー”であった。

理由は、まず、平均して頭の良い犬だと聞いたこと、ジャンボ宝くじを買い続けてもついで高額賞金に当たったことの無い我が家では、ワンちゃんまで外れでは困るのである。次に、性格

が温和で人間大好き犬だと聞いたこと。独り孤高を保つという猫的性格も悪くはないが、家族と一緒に行動するのが日常の我が家には向いていない。人の出入りも少ない方ではないから、中には気に入らないのも必ずいるはずで、噛みつかれても弱るのである。次に、地味な風貌。犬の癖に水が大好きとあって、油性の強い毛は艶やかに光ってはいるものの、連れて歩いても知らない人は雑種としか思わない、その癖、性能発揮すれば群と来ればもう言うことなし。こいつに決まりだ。おまけに、無駄鳴きも遠吠えもまずしなとは言う。なにやら良いことばかりだ。後は飼い方次第と心を決める。牡にするか牝にするかも、重要な問題である。多くの経験者の言によっても、人間の子供と同じでやはり男の子は動きも激しく活発だし、女の子は優しい面が目立つと言う。大型で、強くて、元氣良く駆け回って一緒に遊べる奴が欲しかったのだが、女房は優雅に足元を身を寄せる方を望んだ。

「結婚する時も、女の子ならそんなに飛び抜けていなくても

お嬢さん探せるけど、男の子だと容姿端麗でチャンピオンの賞暦だとか何だとか持ってないと、なかなかお嬢さんになつてくれる娘がいんじゃないか？」

と言うことで、うちの子は女の子と決定した。チャンピオンに仕立て上げる苦労はいとはないにしても、それでは有名校に入ることを期待されている子供と同じで犬の方からすれば気の重いことにもなりかねない。黒い牝のラブラドルと決めたものの、当時は未だこの犬を飼っている人が少なく、レトリーパーのクラブも無かったから探すのが大変であった。ペットショウのウインドーに大型犬は並んでいない。

同じラブラドルと言ってもいろんなラブが居る訳で、犬の世界だって「薫が鷹を産む」のはなかなか難しいことだろうから、ある程度は血統も気なる。一度、家族になったからには「選び違えてたから、お前いららないや」とは言えないのだ。少なくとも十五年・・・犬の寿命がそうだとすれば・・・以上は付き合うことになるのである。あの動物愛護にうるさいはずのフランスでさえ、長期のバカンスに出るために邪魔になった愛犬を捨てていく不届き者が少なくないと新聞が報じていた。例え

どんな鈍犬が来たとしても、人間としてそんな真似は絶対てきない。許せない。

2 受け入れ準備

「ラブラドルの仔犬は頭が良いだけに悪戯の天才ですよ。お庭の木なんか、みーんな無くなりますよ。」

ラブを家族にと決めた途端、獣医さんは庭に目をやりながら物騒なことをおっしゃる。あるラブ君は十米もの大きな木を見事に倒してしまったそうである。我が家の庭には十米位の辛夷の木がある。それが倒されるとちよつと物騒だが、他には大した木は生えていない。苦労して植えた芝生がちよつびり惜しい気はするが・・・。



悪戯の時期を過ぎて出来上がった大人のラブを迎えるのも悪くはない。獣医さんは庭の木を例えに出されたけれど、悪戯の天才ってことは・・・庭だけでは済みそうも無いってことだろう。しかし、どうせ家族として迎えるのなら、仔犬の時から育てたい。仔犬の可愛さは庭の雑木に替えがたい。やっぱり何処かでよい子が生まれてくるのを待とう。その間、こちらはシャベルを握って砂利・砂・コンクリートと奮戦。鉄工所にフェンスを発注して、芝生の部分に仕切りを作り、日当たりの良い場所に五坪ほどの仔犬の運動場と水飲み場、排泄物処理用の排水口を、手のひらの幾つかの豆と共に、何とか作り上げた。本当は五十糎以上の厚さに、おがくずを敷き固めて、汚れたらそっくり取り替えるのが、仔犬の脚には良いのだそうだけれど、そんな大量のおがくずは何処で手に入れば良いのかもわからないし、敷き替えの手間を考えると、都会の真ん中では無理な話で、気の毒だがコンクリートで我慢して貰うことにした。その代わり日向ぼっこで寝そべるであろう部分にはなるべく大きな絨毯でも敷いてやろう。

新しい家族を迎えるとなると、準備しなければならない物が

沢山在るものだ。運動場は出来たけれど、お家はどうしよう。

ものの本に依れば、いわく「夏は風通しが良い様に裏窓を設け窓にも出入口にも蚊が入らない様に網戸を付けること。また、強い日差しが屋根を直射して室温が上がらない様に天井を付けるとか簾か何かで屋根全体が被われる様に、冬は逆に冷たい透き間風が吹き込まない様に、自動開閉出来るドアを付けるとか厚手の垂れ幕を下げると良いでしょう。小屋の内部に陽が当たらないのは衛生上も良くないから、中まで日差しを受けられる様にする。湿度を防ぐためには地面から相当の高さの床を設けること。掃除をし易い様に高さは高くし、室内の広さは犬が手足を充分に伸ばして寝られる広さが最低限必要です。出来上がった中に入って見て下さい。人間が居心地良く思えるものでなければなりません。設置する場所は、なるべく人の居る場所に近いほうが良いでしょう。」とある。全く以ておっしゃる通り。要するに、それは人間の住まいとなら変わるところが無い。そこで、我が家では小屋を造るのは止めにした。これなら庭に面した家の一隅をもっての方が犬も喜ぶし、小屋を造る手間もいらぬ。「家の中が犬臭い」などとぬかす奴は我が家

に出入りして戴かなくって結構だ。なんて、多少ならず意固地に構えて実行したが、これは全くの杞憂であった。綺麗好きなラブはこちらが怠らずに手入れをしてやりさえすれば、下手な人間よりは余程臭くなんかなかったのである。

3 初めまして

できれば夏休みが明けて、暑さが和らぎ、寒さが訪れるのは未だ相当の期間がある頃チビちゃんを迎えたかったのだが、思い通りの季節には巡り逢うことができなかった。

お願いしてあった獣医さんから「適当な子が生まれた様ですよ。」との連絡を戴いたのはもう秋風が吹き始める九月の末であった。早速、予約の電話を入れる。生まれたばかりの仔犬達に、外部の者が迂闊に触れては、どんな病原菌を運び込まないとも限らないから、チビちゃんにお目に掛かれるのは一カ月ばかり先になる。初産で、牡五頭、牝四頭の誕生だと言う。父親も母親も黒毛だから産まれた子供はみんな黒。その中にうちの子になる奴が居るはずなのだ。どんな子なのか心が弾む。

名前は春から決まっていた「ノイ」である。「うちノイぬ」だから命名したのだけれど、後で考えてみたら「よそノイぬ」

も、ノイになる。

「洋犬だから、英語で何か教えるとしたら、ノイと間違えてかわいそうかなあ？」

「だいじょうぶよ！頭良いんだから！」

「そうだね、ローマ字で書けばNOI、ナンバーワンだもんね。」

いよいよその日がやってきた！十月二十七日の水曜日。秋風が、庭の辛夷の葉を乾いた音を立てて吹き抜ける季節になっていた。ラブラドルに詳しい獣医さん夫妻と待ち合わせてチビちゃんを見に行く。体型、頭型、脚、目、耳、尻尾、性格・・などなどなど。もう、数十年も家に犬の居ない生活をしてきた自分ではどれを選んで良いのか自信が無かった。女房と二人だけで選んだとすれば、きっと可愛らしい顔付きで一番最初に駆け寄って来た子を選んだことだろう。運命の厳粛な一瞬は至る所に転がっているものだから、繁殖者に信頼が置けるのであれば、勿論、その程度の選択で充分なのであろうけれど、犬を飼うことにした最初から、恐らく最期の死に水を取って戴く迄、ご面倒を掛けることになるであろう獣医さんに、迷うと

ころは総てをお任せすることにした。

庭先の陽だまりに、組み立て式の六面フェンスに囲われて九頭の子ビどもは群れていた。

「わあ！可愛い！」

清らかに澄んだ目、ちよこちよこ動く可愛い脚、小さな尻尾と、ちよこんと付いた耳・・・どれでもいいや！

サークルの外から獣医さんはまるで猫の子を掴み上げる手つきで、器用に一番大きな子の首筋を掴んで持ち上げた。キャンとも言わず、ばたつきもしないのは性格も大らかなのが多いそうだが、これは男の子であった。

瞳の色彩、歯の噛合わせ、四肢の具合から全体のバランス、胸の厚さ、くるぶしから掌、指の具合、耳の穴からお尻まで覗いて、獣医さんはどっしりと体格の良い女の子に白羽の矢を立てた。当方に異存はない。この子に決まりだ。

「初めましてノイちゃん！よろしくね！」

「あらあら、汚れますよ。あんよもお尻も泥んこだから。」
と言われたときにはもう遅かった。女房も僕もトレーナーの胸元は泥だらけ、だが、小さな尻尾を一心に振り動かすチビすけ

は、そんな汚れがちつとも気にならないほど可愛い奴だった。

抱き上げて顔を近付けると、仔犬特有の甘ったるい香りが漂う。もう、すぐにでも連れて帰りたい。

「それでは親元から離せる六十日になる迄、大事にお預かりしますので。」

と言う繁殖者の言葉に従って、養子縁組の手続きを終え帰っては来たものの、日が経つに従って、うちの子が置かれている環境に気になる点が増つか生じてきた。一つは、その時は何気なく見ていたのだが、繁殖者の家に多種類の動物が雑居し過ぎているのではないかと云う点であった。そこには覚えているだけでも、ラブラドルのお母さんと九頭の子ビちゃんの他に、シエバードが三頭、何だか知らない洋猫、インコ、その他の鳥達と、ちよつとしたペットシヨツブなみであったこと。二つには、お母さんの入れられていた小屋がいかにもみすぼらしく「手足を伸ばして・・・」どころか、寝られるのかなと心配になる程の広さしかなく、しかも陽の当たりそうもない場所に造られていたこと。三つには、「こうやってフェンスで囲って、何時も仔犬達に日光浴させるんですよ。」と言っていた場所が泥ん

こだったことである。他の動物に触れる機会が多いと云うことは、抵抗力の弱い仔犬にとって怖い病気に感染する機会が多いことになるし、むき出しの地面の上で転げ回って遊ぶこともその危険性を増やす。様々な寄生虫に取り付かれる可能性だっておおきくなる。現に「前にシェパードの子を四十五日で譲ったところ、貰われていってすぐに病気になってトラブルが生じたので、うちでは六十日過ぎてから引き取っていただくことにしました。」と言っていた。母親がいろいろな予防注射を受けていて、仔犬達はその母乳で育っている間は母親の免疫が伝わるけれど、離乳期になると免疫は切れる。この時期に仔犬達はパルボ腸炎を始め四種類ほどの予防注射を受ける。二回に渡るこの注射を終えた後でも、二週間は危険を避けるために外に連れ出してはいけないと云うのが常識だそうである。

さあ、そう思い始めると心配で落ち着かない。早くチビすけノイと暮らしたい気持ちも手伝って、獣医さんに指示を仰ぐ。

「四十五日を過ぎたら親元を離れても大丈夫でしょう。予防注射その他は引き取ってからやりましょう。」

と云うことになった。

「獣医さんがそうおっしゃるのなら、構いませんが、何かあってもうちでは責任持てませんよ。」

繁殖者は先のトラブルによほど懲りているのであろう。何度も念を押されて、ノイを引き取る日は産まれてから四十六日目の十一月六日の土曜日と決まった。またまた獣医さんご夫妻にご足労をお願いして立ち会っていた。

ノイは、うちの名前を書かれた白いリボンを首に巻かれ、他のチビどもから離されて一匹だけ家の中にいた。我々を見るとすつとんで来て尻尾を振る。未だ出来ていないと言う血統書は後で送って貰うことにして、その他の手続きを済ませ、晴れてノイはうちの子になった。

ノイにとっては生まれて初めてのドライブである。混んできえいなければ一時間ちよつとの距離だけれど、悪酔いすると可哀そうと言うことで、獣医さんに車酔い防止の鎮静剤を飲ませて貰う。ノイは嫌がりもしないで飲み下した。

助手席の女房の膝の上で、毛布にくるまったノイは女房の腕を両手で確りと押さえ、おとなしくその儘の格好で眠り続け、薬のお陰か酔って戻したりすることもなく我が家に到着した。

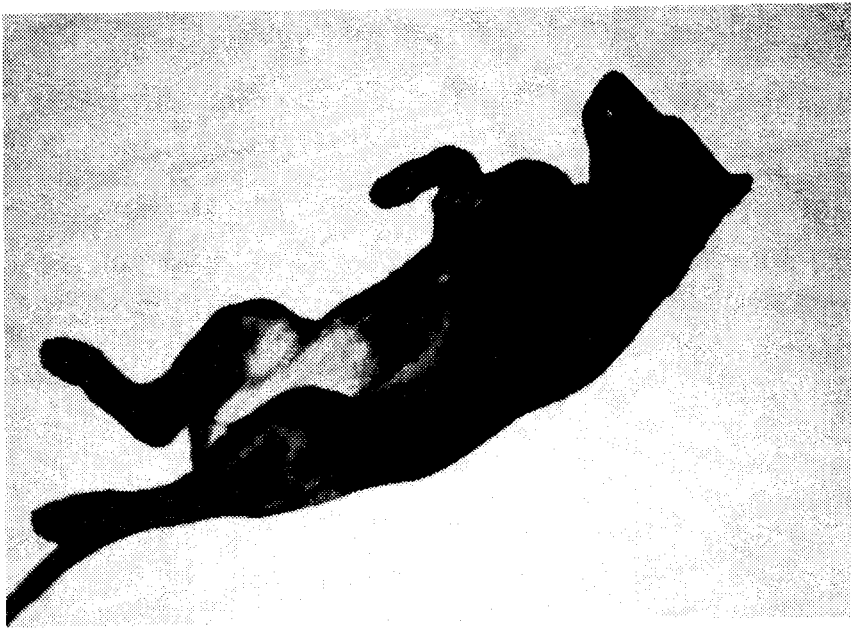
4 頑張りノイすけ

「汚れがひどいようですから、ノイちゃんお風呂に入りませうか。」

と獣医さんの奥様がお風呂の使い方を模範演技で示してください。頭から洗っていくのは、もしも蚤などが付いた時、身体から洗い始めると蚤は頭のほうに逃げ込んでしまうから。ぬるま湯で最初水洗いするのは人間の髪洗いと同じこと。シャンプーはしゃれた香料入りなんかではなく、ちよつと硫黄臭くて高価だけれど、セリグリーンが洗浄効果と共に、ふけを落とし皮膚病の予防効果も期待できる現在のところ良いと思われる洗剤であること。脚の付け根、脛の骨に添ってくぼんだ所、足の裏の切れ込み、お尻の辺りなどは特に丁寧に洗ってやる必要があること。余り頻繁に入浴させ過ぎてもいけないけれど、二・三週間に一度は洗ってやるのが良いこと。入浴後は水気を良く拭き取ってやること。などなど……その手際の良さと共に教えられた点の多い実習であった。

入浴の後、女房の腕の中で眠ってしまったノイをそつとクッションの上に移す。

「さすがラブですね！のんびりしてる。他の犬だと目を覚ましてしまいますよ。」



与えられたクッションの上で一寝入りしたノイは、元氣良く起きだして辺りを見回し、女房にまわり付いて尻尾を振る。

環境の変化を気にする風は殆ど無い。まるで「ここで生まれま
した」と言う顔付きで、憶することなく、手当たり次第に辺り
の家具に取り付いて噛み始めた。しかし、自分を抱いて来てく
れたこの人は一番頼りになる奴だと決めたのか、女房の動きを
追う目つきは真剣そのものである。だが、その間も噛み付き運
動の方は休もうとしないから、たまらない。乍ちのうちにテレ
ビの台が、うっかりしているうちに、敷居の一部がノイの歯形
で刻まれた。納得、これなら十米の庭木もすぐ倒せる。

「お母さんの匂いを付けたタオルですから、これを敷いてや
ると落ち着くでしょう。」

と言って、繁殖者が渡してくれたタオルには目もくれず、立て
ばスカート、座れば袖口を両手で押さえ込んで、好き好き好き
とばかりに噛み回る。これは愛情表現でもあり、成犬になつて
もやるけれど、大人になるとちゃんと力具合を加減するし、や
り方も変わってくる。しかし、仔犬の時はそうはいかない。指
には時として凶器に変身する真っ黒な爪を持ち、小さくて可愛
いお口には、これまたちっちゃくて可愛らしいけれど、確りと
した前歯が綺麗に生え揃っているからたまらない。以来、我が

家の普段着は作業着まがいのぼろになった。

仔犬には、して良いことと悪いことを確り教えなければいけ
ない。これは人間の子供の場合と同じである。犬に合わせて生
活してはいけない。そうした生活は長続きせず中途できつと
投げ出したくなるに決まっている。これから長い年月を共に楽
しく暮らすために、自分達の生活の基本を替えること無く、そ
れに添って、誉めと叱りを上手に使って教育する。まだ手ビだ
から可哀相とか、分からないだろうと思って、そのけじめを教
えて遣らない方が仔犬にとつてはよほど可哀相だし、人間にも
困った状態を引き起こす。仔犬の頭脳の発達は、予想以上のも
のがある。時には、そんなことまで分かっているのかと舌を捲
くことがある。ラブドールは、誉められるのが大好きだ。何
かを教えようと思ったら、七っ誉めて、三っ叱りながら教える
のが良い様だ。偶然も利用する。誉めるときは心のそこから一
緒に喜んで讃めてやること。口先だけの誉め言葉は何の役にも
たたない。叱るときも同じだ。もし、叩くにしても、頭やお尻
を叩いても殆どきかない。大人になってそれが相手の怒りの表
現なのだと理解する様になってからは別だけれど、仔犬のう

ちは、下手をすると、それも遊びのうちに取り入れられてしまふ。手を下すにしても、例えば、食卓の上に顔を突き出してきて困る場合ならば、平手でばしつと叩く。袖口を噛んで困る場合には、空いている方の手での人差し指で口吻の横をばちんと弾いてやる。もちろん、何れの場合にも「だめ！」とか「いけない！」とか「ノー！」とか、はつきりと、それがしてはいけないことなのだと分かる言葉を添えて叱る必要がある。

しかし、ラブラドルは、肉体的苦痛によって何かを思い止まるタイプではない様で、お座りを覚える頃になると、むしろ口で御説教を垂れた方がより効き目がある様だ。

「向かい合うように座らせて、目を見つめ、暫く御小言を言つてやると、なるべくこちらと目が会わない様にしながら聞いてくれるけれど、効き目あるみたいよ。言うことがなくなっちゃうと後はただブツブツブツブツって言うだけなんだけど。」

と言う、先輩の言に従つてみたところ、確かにこれは有効であった。耳をペったりと後ろに引き、次第に頭を垂れて明らかに恐縮の意を表する。人間に対してだつて同じだけど、完全に落

ち込ませてしまわない様に、ひねくれたり、おずおずした犬にさせない様にと、とかく叱り方のテクニクは難しいものである。

どこからどこまでは良くて、どこからはいけないとするか、しつかりこちらが考えてから叱ることを決める必要がある。或る時は良くて、ある時はそれを叱ると言う様な叱り方は犬を混乱に陥らせるだけなのだ。

ノイが仔犬であった頃を振り返ってみると、我が家は相当のスパルタ教育であつた。これは、我が家と言うよりは、女房はと言つた方が正確で、獣医さんから、末長くノイと楽しく暮らすためには、これこれだけと言われたことをきちんとして守らなければ気の済まない女房は、時に涙を浮かべながら御説教を垂れていたが、可愛がる方も真剣であつたせい、ノイは叱つてくれる女房を一番慕つていた。女房はまた何でもノイに懲りずに根気良く教えた。

「ね！綺麗でしょう！これ、お花つて言うのよ！ほうら、匂い嗅いでごらんさい。良い匂いでしょ！」

そんなこと分かるだろうかと思うようなことまで教えている。

ノイがそれを良い匂いと感じているかどうか分らないが、最初は観葉植物の葉っぱを噛み散らかしていた奴が、薔薇やシクラメンに顔を近付けて、香りを楽しんでもいるかのごとき様子を見ると、教えて無駄に終わることはない様な気がする。独り留守番をさせられている時でも、観葉植物や庭の草花を引きちぎったりしなくなったのは言うまでもない。

女房に較べて、私のほうはルール破りの甘やかしが多かったから、それは、叱られた時の精神的な逃げ場になっていたのかも知れないが、ノイはひねくれることもなく、すぐに我が家の生活リズムに慣れ、躰の苦労は楽しみに変わった。

ラブラドルが盲導犬に向いていることの一因は、躰られたことをぎりぎりまで守ろうとする性質をあきれるほど強く持っていることであろう。我が家の日常生活の場は二階になっている。ノイは家に来てからすぐに、チビにしてみれば一段一段が身の丈ほどもある急な階段を一気に登り降りする術を身に付けた。どなたかお見えになった時は下の部屋にお通しすることが多いから、ノイがいちいち玄関口に顔を出されたのでは困るのである。女房は「降りていいわよ。」と言う迄は勝手に降りな

い様に教え込んだ。ところで、その女房殿が下の部屋で飲んでいた客の席について加わってしまい、二階の台所で揚げ物をしていたガスの火を迂闊にも消し忘れ、鍋に火が入って危うく火事になりかけたことがあった。その時まだ仔犬だったノイは二階にいたのだが、真っ黒な煙が二階のへやに充滿し、身を伏せたノイの頭すれすれにまで迫った中で、階段に前足を掛け途方に暮れたような顔をしながらも降りてこようとはしなかったのである。この時は大事に至らず、家もノイも無事だったけれど、「今度こんなことがあったら、降りて逃げていいからね！真っ先に逃げ出すのよ！」と教えた効果のほどは、幸い、こんなことが再び起こっていないから不明である。

5 入れること 出すこと

獣医さんのたててくれたメニューによる食事がノイは大変気に入った様である。それは、サイエンスの幼犬用ドックフード（体重1kgに対して一日につき三十g。ノイは家に来た時四・二五kg、最初は一日五回の食事にしたから、一回分は二五・五g）に、デビフの黒缶茶さじ一杯を加え、犬用の粉ミルクを糊

杖に溶いてまぶしただけののだが、毎回待ち兼ねた様にべろりと平らげてまだ欲しそうな顔をする。これだけ食欲旺盛ならば、と獣医さんに太鼓判を押されたのは良かったけれど、食べ終わった途端にもう次の食事のことが頭から離れないらしい。

食べ物はどこに入っているか、それを取り出す時にどんな音かするのか、コンピュータ顔負けでたちどころに記憶されるらしく、誰かがそれに触れようものなら、サークルから出して貰って膝の上で遊んでいる時でも、ちよつと首を傾げて小さな耳をびくびくっと動かすと同時にすつ飛んで行く。仔犬の間は特に間食を避け、適量の良質なドックフードを食べさせることが大切である。仔犬のおねだりに負けて人間用の油性の強いスナック類などを与えることは厳禁である。最初からそんな事をしなければおねだりなどしない。今でこそ我が家ではだいぶだらしなくなってしまうたが、成長期には全く人間の食べ物を与えなかった。ノイの方もそれは自分の食べ物ではないと思っていた様だ。他のものでお腹が満たされた仔犬は、必然的にドックフードを食べなくなる。それは、仔犬の発育のバランスを崩し、可愛い仔犬を徐々に死に追いやることに他ならない。どうし

ても与えるのであれば、糖分・塩分・脂肪・ビタミン等に気を配って調製された犬用のおやつを用意しておくことである。

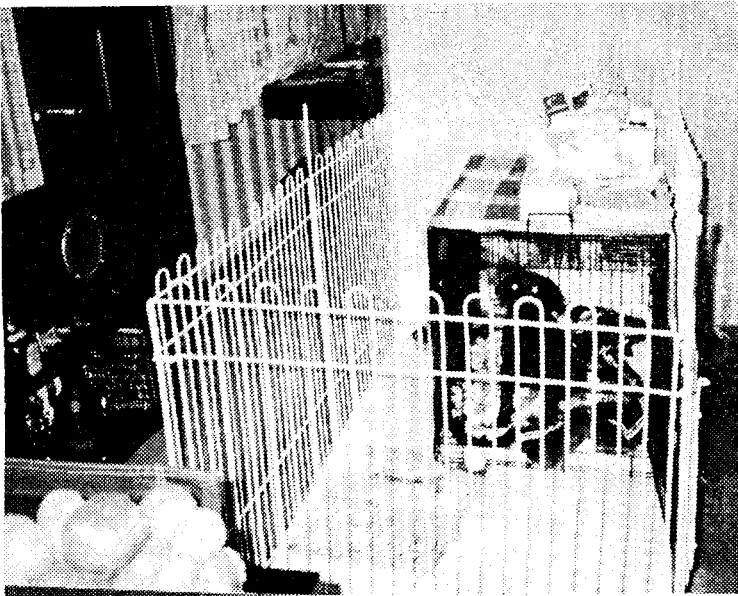
ノイは、果物も野菜も大好きだ。バナナやネギの類は犬には悪いそうだが、知らずに与えたバナナは自分から吐き出した。蜜柑・林檎・柿・梨・桃・葡萄・苺・西瓜・大根・人参・キャベツ・白菜・サラダ菜・レタスと何でも与えれば生でバリバリ食べる。繊維質の食べ物も犬には必要なのだが、果物の糖度はとても高いから、与え過ぎには御用心である。幸い、ノイは「ご飯食べたくなーい」なんて言葉とは無縁に成長したが、一時は背中が平らに見えるほどのデブになった。これは牛骨の与え過ぎで、カルシウム豊富で良い様に見える牛骨には、髓の部分に脂肪分が多いという落とし穴がある。とにかく、ラフは、口から入れることが大好きだ。

最初の計画では、ノイのために造ったコンクリート敷きのスペースに面した洗面室の一隅を犬小屋代わりにする予定だったのだが、これから冬に向かって日増しに寒さがつのる今となつては、風邪を引かれても困るし、目も届きにくいと言うことで予定変更。二階の居間の一隅に、絨毯が汚されないように厚手

のビニタイルを一畳分位敷いて、六面フェンスで囲い、組み立て式のケイジにベットカバーを掛け、中に毛布とクッションを置いて寝場所とし、ケイジに付いていたトレイを引き出して古新聞を敷いてトイレに充てた。こちらの目から見ればその一隅は落ち着いて居心地も良いし、我々の姿も目で追えるはずなのだ、ノイはのんびりそこで昼寝を楽しんで居てはくれなかった。

「私だけこんな囲いの中に入れとくのは不当だわ！ さっさと出してよ！」と言わんばかりに、人の姿を見れば全身全霊を込めてフェンスにどすんどすと懲りることなく体当たり、その根気の良さにはほとほと感心させられたが、おしっこは所定の場所でやってくれないし、飲み水はひっくり返すので、その我武者羅振りが落ち着くまでの二か月間は全く大変であった。人がいる間はそれでもまだ良いのだが、誰もいなくなると孤独を感じる物々を噛みたくなるものなのか、手当たり次第に咬み破る。お得意の体当たりでフェンスをずらして、床に敷いたビニタイルの端に到達しては、小さな歯の癖に五^ミ位は厚みのあるビニタイルを苦もなくぼろぼろにしてしまう。与えられたふわ

ふわのクッションが大好きな癖に、帰ってくるとバンヤが部屋中に舞っていると云った有様であった。幸い、ノイは垂直壁登りだけはやらなかったから、勝手にサークルから脱出することはなかったけれど、中にはそんな妙技を持った子も居る様である。



今にして思えば、この点で、意識が芽生え始めたときから人間との協調生活を知りうる環境にあった子と、そうでない子との違いは驚くほど大きいものがある様だ。と言うのは、後に、この我武者羅ノイすけも、子どもを産んだのだけれど、その氣質を遺伝しているはずの子ビどもの行動が、余りにも違い過ぎていたのである。

ノイの子供達は、五十日もした頃には、サークルの中でちょこんとお座りをしたり寝そべったりしながら我々の動きをじっと目で追っており、構ってくれそうだなと分かるまでは鳴き騒ぐこともしなかった。敷いてやった布団から綿を引っ張り出したり、ベットの裾を咬んだりはしたけれど、サークルから解放されても、与えられた空箱はビリビリに引き裂いて遊ぶことを無上の楽しみとしたけれど、勝手に本棚から面白そうな本を引っ張り出して咬み破ることもなかった。我々のベットに上げてやると、べたっと腹ばいになって一緒にテレビを見ていたし、催してくれば独りでサークルの中に置いたトイレに出掛けていた。入浴もまた同じであった。ノイの子供達は、頭からシャワーをじゃんじゃん掛けて洗っても、「あら、面白いわ!もっ

とやって!」と云った顔をしていたけれど、ノイすけは、水辺に連れていくと、どんなに深いところでも流れの速い所へでも飛び込んで顔を濡らす癖に、顔にシャワーが掛けられると風呂中を逃げ回る。チビの時の入浴経験が無かったか、余程悪い思い出があった性だろう。だから、仔犬を風呂に入れるのがこんなに簡単なことであったのかと知ったのは、ずっと後のことであつた。

これからの永い幸福を考えて、ノイが泣こうが騒ごうが決めた時間は自分の居住区に居ることを義務付けたが、許された時間はサークルを解放して自由に部屋を歩き回らせた。と言つても人間大好きなこのラブは、まるで金魚の何とかみたいに女房か私のお尻にひっついて歩くだけで、自分だけ誰もいない部屋に行こうとはしなかった。我々が床に座れば喜んで膝によじ登り、椅子に座れば自分も椅子に登りたがる程度で、生活に慣れてくるに従つて余り邪魔にもならなくなったから、サークルを開けておく時間は次第に永くなった。またすぐに出して貰えると分かつて、「お入り」に、素直に従うようになった頃には、遂にサークルを取り払った。独り留守番をさせると色々の物に

歯形を付けてくれたけれど、考えてみるとそれらは、ティツツコであったり、石鹼であったり、私が日曜大工でこしらえたテレビの台といった様な粗末な物ばかりで、買い替えを覚悟していた皮張りのソファーなどの被害は皆無であった。ノイが居る所で、数百万円の段通の絨毯をめちゃめちゃにして養子に出された可哀相なラブの話をしたことがあったから、敵は我が家の懐具合を計算していたのかも知れない。とにかく、ラブは好きな人間から離されてケージに入れられるのが大嫌いだ。今頃では、ノイがまるで家主のような顔をして我々と一緒に暮らしているけれど、楽しいことはかりで困ることは一つもない。「お風呂にしようか。」と問いかければ我先にすっ飛んで行くし、シャワーも身体に掛ける分には良い気持ち相にしている。せいぜい顔を洗う時に「鼻にお水が入らないようにしてよ！」程度の忌避で済むようになった。

イギリス人が、日本人には犬を譲りたくないと言う大きな理由が、「日本人は犬を家の中に入れないからだ。」と聞いたけれど、家の中でラブと暮らしてみると、イギリス人の言うことが良く分かる。生活習慣が違うからなかなか難しい点も多いけ

れど、ラブは常時人間と一緒にいられる状態で飼うべき犬であろう。

出す方の躰は、敵が食いしん坊なのを最初は利用した。匂い付けのつもりかどうかあちらこちらの絨毯を汚していた頃、トレイに敷いた古新聞の上でやった時は、大いに誉めると同時に小さなビスケットとか犬用のチョコレートとかの一欠けを与えた。間もなくそれ欲しさに出ないところを無理して一滴搾り出しては、「ね！やったよ、やったよ。あれ、頂戴！」となつてトイレの躰は解決した。

成長するにつれて量も多くなり、古新聞の始末にも飽きてきた。工務店の社長を呼んで真剣に犬用の水洗トイレを考え始めた頃、散歩に出て広々したところで清々と用を足すことに快感を覚える様になったのか、庭に出て斜面を利用すれば足を濡らさずに済ませられると知ったためか、催してくると鼻先で誰かを突っついて「庭に出してよ。」と誘導するようになった。排水口にそれらを流し、再び家の中に戻る時にいちいち足を拭いてやる手間は生じたものの、居間からトレイが消え、古新聞の確保と始末、そして、何よりも犬用水洗トイレ設置のための多

大な出費から解放された。感心させられたのは、それに就いてこちらが何も注文を出したわけでもないのに、トイレの定位置を排水口に向かってコンクリートの傾斜が一番急で流し易い場所を決めてくれたことである。後にノイの子供をお譲りした方が、

「うちの子はあんまり利口なんで、東大出の生まれ変わりだって言ってるんですよ！」

と、おつしやっていたけれど、ラブラドールと暮らしてみると感心させられることが驚くほど多いのである。

